

オンライン聖餐をめぐる

藤本 満

教会は、礼拝も交わりも、結婚式・葬式に至るまで、建物があり、そこに「行く・集まる」ことから始まった。ところが突然、集まることが感染拡大につながるとの危機意識から、教会はオンライン上に移住をせざるを得なくなった。礼拝・祈祷会・教会学校・青年会・聖書研究会と、世界中のキリスト者が同じ方向性を模索し始めた。映像の配信方法、それに合わせた礼拝形式を模索する中、最も苦慮したのが聖餐式であった。解決は大きく3つに分かれた。

- ① 礼拝における聖餐を当面「行わない」
- ② 礼拝堂で聖餐式は毎週行うが信徒はインターネットで「信仰をもって見る」ことによって、その恵みにあずかる
- ③ 家庭でパンとぶどう酒（液）を用意し、牧師の祈りにしたがってそれにあずかる

過去のスペイン風邪のような感染爆発において、教会は聖餐をどのように扱ったのかという論議は残されていない。まして、オンラインという技術が、ごく最近のものであるので、新しい可能性にどう向き合うのか——それは、教団教派の聖餐理解を超えて、試行錯誤されていった。諸教派の考え方がネット上に散見する中、筆者が興味深く感じた3つを紹介してみる。いずれも2020年の初期の段階のものをあえて選んだが、感染拡大が長く続いても、途中で聖餐のやり方が変わった時のための神学的検討はなかったように思う。

I. ディアナ・トンプソン（ルター派）

米国の諸教派の中で、神学的な見知をもって、オンライン聖餐の可能性を積極的に切り開いていく最初の発言は、ディアナ・A・トンプソンが執筆した大学のブログ記事であったと思う¹。聖オラフ大学の教授・ルター研究センターの長としての文章（2020年3月26日）である。WHOがパンデミック宣言を出す以前のことである。所属するアメリカ福音ルター派教会（米国最大のルター派教団）が当面の聖餐停止を推奨する中、彼女はオンライン礼拝の中で聖餐も行う可能性を説いた。オンライン礼拝が始まって数週間もしないミズーリ州からの提言であった。

まだ新型コロナ感染もよく分からない中、早々に説得力のある論を展開できたのは、トンプソンがすでに *The Virtual Body of Christ in a Suffering World* を出版していたからであろう²。この書における「virtual」の意味は、含蓄があり、本稿でも、後半であらためて検討したい。

ブログ記事の流れを以下に記してみる。そもそもはIT関係に微妙な疑念を抱いていた自身が大きく変わったのは、癌との闘病期間であったという。対面で言葉を交わせるのは、医療関係者と家族だけに限定され、大学・教会・地域での交わりは一切絶たれた。ところが、それによってインターネットの豊かな、信頼ある交わりへと導かれた。ネットでの友人の励まし、助け、支援、祈りが、突如リアルなものになった。「バーチャルな人のつながりは、リアルな交わりの『お粗末な代用』ではなかった。それは絶望の時期、私の魂を満たした」。

米国福音ルター派教会は、病やその他の理由で教会に来ることができない人のための聖餐についてのガイドラインがあった。牧師がその人のところにいて個人的に聖餐を執行することもあれば、信徒が会衆礼拝での聖餐を取り分けて、その人のところに届けることもある。

¹ Deanna A. Thompson, “Christ is Really Present Virtually: A Proposal for Virtual Communion,” <https://wp.stolaf.edu/lutherancenter/2020/03/christ-is-really-present-virtually-a-proposal-for-virtual-communion>. (2021/10/30 最終アクセス)

² Deanna A. Thompson, *The Virtual Body of Christ in a Suffering World* (Nashville: Abingdon, 2016).

そこにトンプソンは、オンライン聖餐を提言した。牧師は信徒に対して、前もって聖餐のためのパンとぶどう酒を準備することを教え、オンライン礼拝における式文と祈りをもって、礼拝する場所は異にしても一同でそれにあずかる。一言で言えば、集まっている場所がローカルな建物であっても、インターネット上であっても、聖霊は聖餐を通して、あずかる者をキリストと一つにし、互いとも一つとすることができる。筆者は、トンプソンが繰り返して用いる「バーチャル」という表現は、英語の「by virtue of Holy Spirit」——「聖霊の力によって」という意味に近いと感じた。聖霊が働くとき、私たちはバーチャルな世界に「現実」vs「仮想」という二元論を当てはめるべきではない。そもそも「キリストのからだ」は、聖霊によって形成されるキリストの「バーチャルなからだ」であろう（このことについては、結語に言及）。

さて、ディアナ・トンプソンは、キリスト者の信仰を養うために、ルターが説教の十全性を強調していたことを理解している。神の言葉は、礼拝で聖書が読まれ、福音が宣言されるときに、神が与えてくださる賜物である。賛美や礼典は、神の言葉を会衆がともに味わい、それに応答する手段である。また、罪が告白されるとき、神は直接に赦しを与えるために言葉をくださる。したがって、説教の意義と力は、それがオンラインであっても減じられることはない、というのがアメリカ福音ルター派教会の判断であった。もともと、当初、教団の判断としては、聖餐停止をレントの期間（3月）の聖餐断食として捉え、長期にわたるという前提はなかったようである。

トンプソンは、ルターによる説教の強調を認めた上で、さらにルターの十字架の神学に話を移して、オンライン聖餐の可能性を訴えている。十字架の痛みと苦難の中に、神はご自身を隠すように存在しておられる。私たちの想像を超えた方法で存在しておられる。同じく、この試練の中であって、インターネット空間の「中に、共に、そしてそれを通して」神は現実臨在しておられるという可能性を考えるべきではないだろうか、と。ローカルな礼拝で互いの交わりを大切にしてきたように、離れていても、自宅のリビング・ルームにあっても、聖餐を通して互いが一つであることを確認できるように、積極的にオンライン聖餐式に向けて、その手順・考え方を整えていくべきだと訴えている。

II. アングリカン（英国教会）

16世紀、トーマス・克蘭マーを中心として展開されたイングランド宗教改革が力を入れたのは、①英語の聖書翻訳、②宗教簡条、③説教の書、そして④イングランド国教会の「いのち」とも言える『祈祷書』である。『祈祷書』が完成したのが、1548年である。これとともに、「礼拝統一法」（the Act of Uniformity）が施行され、すべての教会で共通に使用することが義務づけられた。もっとも、1549年に克蘭マーはスイスからイングランドに宗教改革者マルチン・ブツアーを呼び寄せているが、カトリック色が残っていた箇所（訂正アドバイスを全面的に取り入れ、52年に『第二祈祷書』が発行された。国教会の祈祷書・典礼書の原型となったのは、こちらの版である。その後、約600回の改訂がなされたと言われているが、ピューリタン革命時には、『祈祷書』の使用は禁じられ、最終的にピューリタン革命の終焉、王政復古で確立する1662年のアングリカン『祈祷書』に至る。

アングリカンの論考の中で、対照的な2人の人物を紹介する。先に、ディアナ・トンプソンと逆の立場となるブライアン・ダグラスを紹介し、次にトンプソンと同様、英国教会の立場からオンライン聖餐の可能性を探るティム・ハリスの論考を紹介する。

A. 「スピリチュアル・コミュニオン」（ブライアン・ダグラス）

まずは、ダグラスの結論的コメントを引用してみる。

「バーチャル」という概念は、リアルには存在しないところに、「同等の」という概念を入れ込もうとしている。一つの場所にあるパンとぶどう酒は、他の場所にあるパンとぶどう酒とは同じではない。（礼拝堂での）司祭による聖別が、インターネットを介しての礼拝で信徒の家庭にあるパンとぶどう酒に届くことはない。……礼拝堂にいる司祭が、視聴者の家庭にあるパンとぶどう酒がどのように扱われているのかを見届けるすべもない。

「同じではない」と強調するとき、ダグラスは聖餐における司祭の所作に論

拠を置いている。司祭の所作とは、イエスが弟子たちを前にして、パンを「取り・感謝し・裂き・与える」という一連の動作のことである。聖餐式において、司祭は、イエスに代わって（イエスに真似て）、パンを取り、感謝の祈りを捧げ、裂いて、それを信徒に与える。司祭による一連の所作が、オンライン聖餐では実現しないという。つまり、各家庭において、パンとぶどう酒を「取り、感謝を捧げる」ことができたとしても、司祭の「裂く・渡す」という行為が実現されていない。したがって、聖餐を成り立たせている一連の所作が壊れてしまうという。『「バーチャルなユーカリスト」は、聖別の神学を傷つけ、欠損させ、不完全にすることになる』³という。

ダグラスがどうして、このような論法を展開するのであろうか。それは、次に紹介する同じアングリカンに属するティム・ハリスの論考と読み比べるとよくわかる。ティム・ハリスの論考を検証する前に、簡略にその違いを指摘しておいた方が、わかりやすいと思う。

・聖餐における司祭の立ち位置の違いである。ダグラスは聖餐の中心にキリスト、この場合、司祭を置く。司祭の所作が、パンとぶどう酒の実体変化を起こすわけではない。しかし、この所作こそが、キリストの行為として物素を聖別するものであり、この所作はバーチャルな世界では不完全であるという。

・これに対して、次に検証するハリスは、アングリカン聖餐の「問題の核心」は受領者の信仰と聖霊の働きにあると考える。

・ダグラスは、克蘭マーの言葉を引用しながらも、アングロ・カソリック⁴の典礼学者グレゴリー・ディックス (Gregory Dix) を援用する。

・これに対して、ハリスは、克蘭マーの言葉を引用しながら、ピューリタンのウィリアム・パーキンズ (William Perkins) を援用する。

³ Brian Douglas, "A 'Virtual' Eucharist in Times of Pandemic: Biblical, Theological and Constitutional Perspectives," *Via Media*, May 2020, https://researchoutput.csu.edu.au/ws/portalfiles/portal/44648411/Via_Media_May_2020.pdf. (2021/10/30 最終アクセス)

⁴ アングロ・カソリックとは、1883年にオックスフォードで始まった「カトリックの復活」と呼ばれる、英国国教会の中の高教会派。

これは言うまでもなく、アングリカンの歴史的な変遷に「幅がある」ことの証しである。同じ『祈祷書』を論拠に置きながらも、その解釈をめぐる、軸足を司祭に置くのか信仰者に置くのか——この違いが現れていることが興味深い。

ダグラスの論には確かに英国教会の伝統が息づいていると言えよう。なぜならアングリカンに、配餐はないからである。それはカトリック教会と同じである。礼拝の最後で、聖餐式に入ると、会衆は一列に司祭の前に並び、物素を直接司祭から受け取る。司祭は受領者の顔を見て、渡す。受領者は、司祭の手から直接に受け取る。それはイングランド宗教改革の祖、トーマス・克蘭マーの時代から同じである。

しかし、筆者の視点（偏りはあるが）からダグラスの論考を読むと、それはあくまで、パンとぶどう酒を配餐しない、司祭が一人一人に直接に手渡しするという論拠にとどまっていると思う。聖餐のパンとぶどう酒は、司祭がそれを「取り、感謝を捧げ、裂き、渡す」ことによって「のみ」聖別される、だから配餐はしない、当然、オンライン聖餐もしないと言っているのと同じではないだろうか。

では、ディックスは、コロナ禍においてどのような聖餐方法を提案するのだろうか。特に聖餐を礼拝の中心としてきたアングリカン教会にあって、この質問に注目は集まる。方法はカトリック教会以来、長く実践されてきた「スピリチュアル・コミュニオン」である。迫害下にあつて、疫病下にあつて、教会はこれまでも次のような形式で聖餐を行ってきた。この方法は、『祈祷書』に、病等の理由で実際に教会に来て聖餐にあずかることができない者に、聖餐の恵みは霊的に届くものと配慮されてきた文言があり、その延長線で、コロナ禍の聖餐に適用しているものである。

スピリチュアル・コミュニオンでは、『アウグスチヌスの祈りの書』（1947年）を用いることが多い。この祈祷書は、教会生活や日常生活での様々な場面に合わせた祈りで、アングリカンの高教会派では一般的に各家庭においても備えられている。そこでは聖餐を受けることができない者の祈りが次のように記されている。

主よ、私はあなたの教会、あなたのからだと血潮が差し出されている祭壇と心をついにし、あなたに賛美と感謝を捧げることを心から願っています。あなたは聖餐に真に現臨されることを信じています。私は今、その聖餐を礼典として受けることはできませんが、霊的に私の心の中に来てください。私はあなたと一つとなり、全霊をもってあなたに信頼します。なにもあなたから引き離すものはありません。私の生と死はあなたの愛の中にあります。アーメン。（下線・筆者）

コロナ禍であれば、画面を前にした全員が、司祭によるパンを取り、感謝の祈りを捧げ、裂き、それを礼拝堂にいる少数のものたちに渡しているのを見ながら、不在者として上記の祈りを祈り、霊的に同じ恵みにあずかろうとする。

教皇ヨハネ・パウロ2世（1920–2005年）は、2003年の *Ecclesia de Eucharistia* の中で、アビラの聖テレジア（1515–1582年）の以下の言葉を引用して、スピリチュアル・コミュニオンを推奨している。「あなたがたがミサにあずかることができないのであるなら、スピリチュアル・コミュニオンを行うことができる。その恵みは計り知れず、神の愛があなたにしっかりと刻印されることになる」⁵。

コロナ禍にあつて、自分でパンとぶどう酒を用意し、司祭の所作と共にそれにあずかるオンライン聖餐への道を開かないのであれば、教会は礼拝で聖餐を行わないか、カトリック教会や英国教会のように「スピリチュアル・コミュニオン」を実施してきた。

中世カトリック教会では、司祭のみが聖餐にあずかり、会衆はそれを「見る」だけであつた。もちろん、そこには聖と俗の区別があり、ラテン語の複雑な賛美と祈りを習得している修道士と、文字も読めない会衆とのギャップもあつた。スピリチュアル・コミュニオンはそのようなものでは決してない。昔からある、聖餐にあずかりたいと真実に願いながらも、その場に行くことができない者のために、憐れみ深い神は同じ恵みを与えてくださるという「牧会的配慮に基づいた規定」を踏まえ、このコロナ禍にあつてより本格的に式文と祈りを整え、

⁵ Pope John Paul II, *Ecclesia de Eucharistia* (St. Bartholomew Bulletin: May 18, 2003), 35.

教会員のほぼ全員が礼拝堂から離れていながらも、彼らが真実な祈りと願いをもっているのなら、「司祭の聖餐を見るだけで」、その恵みは必ず伴うと主張することとなった。

戦争にしろ、疫病にしろ、世界の歴史の中には往々にしてこのような事態はあったはずである。しかし、それがいま世界の教会が集まることを控え、時に禁じられるという突然の事態の中で、多くの教会の選択は、本来の聖餐式規定に添えられた「来ることのできない者」への補足的な配慮を、教会全体に拡大して実践するにとどめた、ということであつたと言えるであろう。カトリック教会とアングリカン教会は、共通した聖餐の基準を尊ばなければならないので、最初に取り上げたトンプソンが言うようなオンライン聖餐へと踏み出すなら、全カトリック、全アングリカンの司教・主教者レベルの会議も必要であつたであろう。それもまた、開催することは可能ではなかった。

そこで、礼拝だけオンラインという新しい手法に切り替え、その中心にある聖餐については、新しい手法を生み出す神学思考よりも、伝統的に存在している（以前は補足的な）考え方に則って、それを全体に当てはめることとしたというのが实际的であつたように思う。ただ筆者にとっては、ダグラスが言う、オンラインにおいては「取る・感謝を捧げる・裂く・渡す」という所作に分断が生じ、家庭にあるパンとぶどう酒では聖餐の実効性を欠くという判断は、納得のいくものではなかった。

B.「問題の核心」（ティム・ハリス）⁶

ティム・ハリスは、宗教改革以来、そもそも、英国教会にとって聖餐はどのように理解されていたのかを、歴史的な考察として論じている。論考のタイトルは「問題の核心」（the heart of the matter）である。クランマーの他には、ジョン・ジューエル（1522–1571年）、リチャード・フッカー（1554–1600年）など、当時の英国教会の聖餐論にとって主要なポイントを、ジューエルの引用をもつて以下のようにまとめている。

⁶ Tim Harris, “The heart of the matter: Holy Communion, effective participation and virtual reality — some guidance from historical Anglican sacramental understanding,” *St Mark's Review* 255 (Mar 2021). (2021/7/2 最終アクセス)

ここで私たちは、3つのことを考慮しておかねばならない。

- ① 私たちは、サイン（パンとぶどう酒）と、サインが示すそのもの（キリストの肉と血）を区別する。
- ② 私たちは、地上に肉的に存在するキリストではなく、天におられるキリストに目を上げる。
- ③ キリストのからだは信仰のみによって食されるべきであつて、他のなにものによるものではない⁷。

聖餐物素とキリストのからだそのものとは同じにはならない。しかし、キリストのからだの現臨在（real presence）が聖餐に伴う。しかし、十字架のキリストの現臨在は、物素ではなく信仰者の心の中に現れる。ハリスはフッカーの言葉を以下のように引用している。「キリストの現臨在、すなわち尊き御身体と御血潮は、外なるサクラメントの中ではなく、サクラメントにふさわしい『受領者』の中に求められるべきである」⁸。

ハリスは、当然のことながら、当時の文献に「エピクレーシス」がないことに注目している。エピクレーシスとは聖霊を求める祈りであり、カトリック教会は、物素の実体変化、後の英国教会の高教会派（ハイ・チャーチ）でも、実体的聖別にとっては欠かすことのできない祈りとなる。この事実は、エリザベス王朝時代、初期のピューリタンの流れを率いたウィリアム・パーキンズ（1558–1602年）などには、顕著である。「聖霊の降臨を求めることは、聖餐のために集まった信仰者が正しくわきまえてそれを受領するためである。すなわち、キリストの受難の恩恵に十分にあずかるため、受領者の生活、賛美、礼拝、奉仕に聖霊が引き続き働かれることを求めての祈りである」⁹。もちろん、パーキンズは最終的にアングリカンではなく、ピューリタンの分類となるが、この

⁷ Harris, 27; John Jewell, *Defence of the Apologie*, ed. Henry Morley (London: Cassell, 1888), 448.

⁸ Richard Hooker, *Lawes*, II, V.67.5

⁹ Harris, 29; William Perkins, “A Golden Chain,” “Of the Sacraments” in *The Works of William Perkins*, ed. J. Stephen Yuille, Reformation Heritage Books, (2020), 71, 75–76.